

あれから7年 終わらない事故、強いられる復興 — 福島は今



原発のない福島を目指して — 福島県民大集会

集会は、潮風吹く開放的な芝生の会場で3300人が参加。実行委員長の角田政志さんのスピーチから始まった。「原発事故でデモや勉強会が行なわれ、節電や再生エネルギーの活用など、社会が変えられるのではと期待したが、現実が程遠い。被災地の厳しい現実を知って欲しいという想いを込め、楢葉町で開催することにしました」と説明した。

鎌田慧さんは「原発は破綻しているのに再稼働しようとしているし、政治は腐敗してムチャクチャでデタラメだ」。

「楢葉町での開催は『復興を強いる国を後押しすることにならないか』とお叱りを受けました。様々な意見がある中、自分の目で見て判断してほしい」「分断されずに共闘していきたいと思います」と武藤類子さんは訴えた。

■進まない廃炉

昨年3月自主避難者の住宅支援が打ち切られ、今年3月末で精神的損害賠償も終了する。事故から7年、避難者への生活支援は縮小される一方だ。

そもそも避難者の認定自体が、避難指示の解除により大幅に減らされている。それは昨年「15万人」と言われていた避難者の数が、今年「5万人」と発表されていることでも分かる。現状がそこまで劇的に変わっているとは思えない。

集会では毎年、「福島第2原発の廃炉」要請が取り上げられるが、県議会は通ったものの、国と東電は未だに廃炉を決定していない。世界は福島原発事故を見て「原発のない世界」を目指しつつあるのに。

避難解除から1年 — 6号線を楢葉町から浪江町へ



翌18日、福島平和フォーラム主催の被災地フィールドワークに参加した。参加者は80人、2台のバスに振り分け満席。いわき市からバスで6号線を楢葉町→富岡町→大熊町→双葉町→浪江町と北上した。

■富岡町

津波に襲われたJR富岡駅は、新しく建て替えられ、直接駅に入るこ

とができる高架も建設中だった。桜で有名な夜ノ森は、昨年4月に避難指示が解除されたが、桜並木の向こうは帰宅困難区域、柵で侵入を規制されている。通りひとつで吸う空気が違うのだろうか？ 不条理はそこそこ。膨らんだ桜の蕾が悲しかった。



■双葉町・大熊町

帰宅困難区域を通るため、常磐線富岡駅→浪江駅間は、列車の代わりにバスが6号線をノンストップで走っている。福島平和フォーラムのバスも止まることはできない。車内の線量が急が上がる。

国が帰還を促す区域は、フレコンバッグを中間貯蔵施設に移動させ、土を削ってきれいさっぱり平らに整地している。対照的に帰還困難区域は放置され、以前の田畑は草木が生い茂ったままだ。

10万ベクレル/kg以上の放射能汚染物質は中間貯蔵施設に行くが、8000から10万ベクレルまでは永久に町内に置かれるのだと、その予定地を案内の人が指示してくれた。道路脇の崖の下だった。

再び解除区域に入ると、所どころ、固まって新築の復興住宅が建っている。現実の帰還者の数を考え、医療施設や買い物場所がまとまったコンパクトな町作りを構想しているという。

■浪江町

浪江町も昨年4月に避難解除になったが、今年1月までに戻ってきた人は震災前の2.3%だ。海岸沿いの請戸地区では、津波で182人の方が亡くなったが、請戸小学校の生徒は全員避難できた。実話をもとにした紙芝居「奇跡の請戸小避難物語」を、地元で見せていただいた。

請戸小から目指した場所は大平山、小学校から1.6km。実際に大平山に立ち請戸地区を望むと、その広大な草原に驚いた。

かつて松林があり家があり道が入り組み、人が暮らしていたことを、海からの風が忘れさせようとしてい

るかのような。草原のなかに、ぼつんと請戸小学校が建っていた(震災遺構として残されることが決まっている)。慰霊碑には亡くなった全員の名前が刻まれていた(写真左)。

浪江駅前通りは除染が終わり、ゴミひとつなく妙にきれいだ。人影はなく、オートバイ1台と自動車1台を見ただけ。

この4月には、なみえ創成小・中学校が開校する。緑の人工芝に青色のおしゃれな校舎がまぶしい。入学予定者は3人と聞いた。避難指示解除区域では、再び「箱づくり」に大金が投じられている。帰還者には手厚いが、戻らない人には支援を打ち切るとは、何と冷たいことか。

原子力緊急事態宣言も解除されない中、はたして「避難指示解除」で安全だと信じられるだろうか。移住先で始まった生活もある。特に子どもたちにとって7年は長く、戻りたくてもいよいよ難しくなっているのではないか。

(写真・文)片桐美佐子

